



2011年6月19日

いま起きつつあること…

桃井和馬さんの
平和講演会から



沿岸の町が全部
なくなっていた

ぼくが最初に被災地に入っ
たのは、3月11日の4日後で
した。車で移動して、岩手、
宮城、福島島の400キロに及
ぶすべての海岸の町が完全に
なくなっていることに驚きま
した。25年くらい世界中を回
り続け、いろいろな戦場に行

きました。あそこまで完璧
に破壊された巨大なエリアを
ぼくは見たことがなかった。

この情景を見たとき、広島
の平和記念資料館で最初に展
示されている写真を思い出し
ました。そこを歩いている人
は、どういうことを感じたの
か。それまで自分たちが生活
していた家、町が、すべて一
発の原子爆弾によって焼け野
原になってしまったのを見て
いたはず。だから、心の
一番深いところに負の記憶と
して刻まれた。それと同じよ
うなことを、今回津波の被災
者の方は見たのではないかと
思いました。

今、新聞を開くと被災者の
人たちのニコニコしている顔
が掲載されています。でも被
災地を回って感じるのは、本
当に、今だからこそ疲れ果て
ている。震災直後は、何が起
こったのかも理解することが
できず、高揚していた感じが
長持ちします。だけど、高揚感

が続かなかった。そして今、
じわじわと心を蝕んでいくよ
うに現実がのしかかってくる
わけです。

母を、父を、兄弟を失って
しまった人たちがそんなに明
るく振る舞うことはできない。
それは、人々の心に、とても
言葉では言い表わせないよう
な傷を残してしまっています。表
では明るく振る舞っているけ
ど、夜になると救いようのな
い闇が彼らを包んでいるのだ
と思えました。

自然に対して
思い上がっていた

ぼくらはあまりにも自然と
いうものをばかにしてきたの
ではないか。たとえば、東電
の人たちは言いつづけました。
「これは千年に一度の津波で
ある」と。だけど、原発の中
でつくられているプルトリウ
ムは半減期が2万4千年です
から、東電は最低でも2万4
千年を考えなくてはいけない。

千年に一度の津波であつたら
プルトリウムが半減期を迎え
るまでに24回の津波が来ると
いうことです。ならば、それ
は想定内であるべきはず。そ
れが、あまりにも人間は自
分たちの力を過信しすぎてい
た、自然をもコントロールで
きると思ってしまった。その
結果が、今回の特に原発の問
題であると思っています。

私は大変に悔しい思いをし
ています。原発に対してきち
んと反対を言っていなかった
からです。ぼくは東京に住ん
で、東電の電気を使っていま
す。この生活を維持するため
には、原発もやむなしかなと
うすうす考えていた。

これと同じようなことは、
たぶん戦争のときに多くのキ
リスト者、また多くの日本人
が考えたのではないかと思
います。このままいけば確実に
戦争が起きるといふときに、
なんとなくわかっていながら
誰も止めることができなかった



2011年6月19日

いま起きつつあること…

た。それが結果的に、第二次世界大戦を生んだのだと思っています。

今の原発の問題は、それにものごく近いと思う。私たちは、実は福島に対しての加害者の立場にある。そうやって自分たちの責任を直視しないまま、ひたすら電気を野放図に使い続けていた。

福島の人たちに毒饅頭を食べさせた

ぼくはチエルノブイリに2回行って取材していますが、これまでみんなチエルノブイリ原発事故の本質を誤っていたと思います。事故の本質は何か。電気なんです。チエルノブイリの周辺に行くとも

すこい数の電気が走っています。ソ連政府は、もしかしたら事故が起こるかもしれないけれども、事故は起こらないかもしれないという想定のもとに大量にチエルノブイリ型

の正体は何かと言ったら、電気であり、人々の個々人の欲望なんです。

今回の福島のこととそれと同じようなことがいえるのではないのでしょうか。田原総一朗さんは、原発は毒饅頭だということを言われていました。原発は「基できると、何基もそこにできてしまう。毒饅頭を福島の人に食わせる。この罪はあまりにも重いです。その一端を、私たちは知ってか

知らずか担っているんだということを、私はここで告白しなければいけないと思っています。

本当に何が大切かを考えるチャンス

ぼくは被災地取材した直後にインドに飛びました。インドのヒマラヤで、チベット仏教の聖地でもあり、ダライ・ラマに近い人たちが朝から晩まで祈りに基づく生活をつづけています。そこは6千メー

トル、7千メートルの山が普通ですけど、崖崩れがガンガンおきる。だけど、昔から住んでいる土地、自分の住みなれている場所だから、彼らは離れることがありません。だから、自然が人間にはコントロールできないものであることを、彼らは実によく知っていました。

ぼくは、今の時代こそ信仰が必要だと思っています。不安なことがいっぱい起きる。その中で、どんな形であれ祈り続けること、人間が絶対ではないこと、神、あるいは彼らにとっては仏かもしれない、そういう世界があることをきちんと認識しないと、人間は暴走する。暴走した結果が、今回の原発事故だと思っています。

人間は地球上で一番素晴らしい存在ではない。逆に言ったら私たちは一部の存在でしかない。そしてその中で生かされている。すべての生命から恩

恵を受けて、風の力を借り、海の力を借り、山から滋養をいただき、私たちは生かされている。それを破壊してしまっているのか、ということは今回あらためて感じました。

南米大陸の一番南のパタゴニア。すぐ下は南極で、寒い。そして秒速80メートルの風が吹く。その中で山が立っています。標高は3050メートルしかありませんが、この山の頂上に登った人間はいないんです。登れないんです。人間にはまだまだ立ち入ってはいけない領域があるということです。

私たちは、この一周4万キロの大地でしか生きることができない。放射線事故で住めなくなってしまう大地があるとするば、それは私たちは自分の首を締めているようなものです。私たちに本当に何が大切なのか、それをもう一回考えるチャンスが3・11以降の世界なのだと思います。